ホトトギス

一月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別認承認雑誌第六二七号
平成三年十二月一日発行（第百十編第一号）

俳句随想〔三百四十三〕

汀　子

前回は「心太」を例に、少なくとも季題ぐらいは『ホトトギス新歳時記』に準拠して正しく使おうと書いた。

今回は相変らず質問の多いのは、動詞の連体形の問題と、音便の問題である。

連体形の問題については以前にも書いたことがあるが、今回は『ホトトギス新歳時記』第二版を例に挙げて述べよう。

①荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

②山小舎に泊つる銀河をふりかぶり　沖村典見

③西方の浄土は銀河落るところ　高濱虚子

文法の上からだけで言えば①と②は誤りであろう。芭蕉の句は「天の川」という体言を形容する連体形の「横たふる」としなければならず、典見の句は、「泊つる銀河」は意味的におかしいから、「銀河」の前で切れていると考えなければならない。とすれば終止形の「泊つ」にしなければならない。③の虚子の句は文法的には正しい。しかし①②は文法的に誤りだからといって俳句としての価値が無いのであろうか。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年一月四日　ロイヤル俳壇

かたくと年始ファックス動き出す
遠会釈年賀の心通はせて
上の句につづく下の句歌かるた
富士へとる旅路水仙郷抜けて
これからが主婦の新年なりしこと

一月八日　工業倶楽部

帰る子に二日の鴨の雑煮かな
正月と思ひ稿債抱へゐし
富士へとるより初旅となりにけり
初旅でありて仕事でありしこと

一月九日　芦屋ホトトギス会

寒禽の来てゐる庭を明け渡す
着流しの似合ふ春著でありしこと
寒卵一つ落して一人の餉

一月十日　下萌句会

予定書き入れ余白なき初暦
初富士を俯瞰着陸態勢に
冬薔薇の香に包まれてゐし奢り
初明り街の灯消えてゆく早さ

一月十二日　大阪倶楽部

寒椿咲けば耐ふるといふ姿
極限の三寒に処す旅衣
寒灯を消し早暁の旅立に
六甲に生れし風花海に消え
寒灯の点る家路につながりし
青空のいづこともなく風花に

一月十二日　綿業倶楽部

旅先に送る春著となりにけり
一泊の帰路に凍てゐし車かな
春著着るつもりの準備だけはして

一月十四日　清交社

新年の挨拶なれば簡単に
もう一度揃ふ年賀となりしこと
初旅は富士山と決められしより
春著着るための早起きなりしかな
消えさうな風花消えず到着す
乗初でありし新車でありしこと
六甲の寒さおろして来たる風

一月十六日　偲ぶ会　ホテルマウント富士

寒の内とて万全の旅支度
富士雲を払ふ早さの寒日和
寒晴の富士の全き姿今
芽吹く木々青木ケ原の樹海とて

一月十七日　偲ぶ会　二日目

人悼む心持ち寄り寒の富士
富士の雪赤く染めゆく朝ぼらけ
この寒の富士を語らぬ人居らず
隠れなき富士にアルプス寒日和

一月十八日　悼　湯川河南様

まな娘より看取られて春隣

一月十九日　有恒倶楽部

風花の舞ふ星空を仰ぎけり
風花の一片頬に消えにけり
富士蔵す闇風花の舞へる闇
風花のまなじり過り夜の静寂
凍蝶や旅の誘ひに乗ることに
ラグビーのぶつかつて又ホイッスル

一月十九日　無名会

凍つる夜の電話予定をくつがへす
左義長に燃すを惜みてゐるものも
燃え盛るどんどひらひら飛べるもの
凍る道おろそかならず運転す
待春の心育ちてゆくばかり
凍ててゐる朝の間暗し旅立ちぬ
はじまりしどんどの火勢つのりゆく

一月二十日　夏潮句会

大寒と思へぬ日和たまはりし
燠赤く隠す焼諸知つてをり
遅れ来し人に当らぬ焼諸も
富士隠す闇風花と星空と
凍蝶のほとりに日差届かざる
マラカニアン宮殿に蝶凍てざりし

一月二十三日　悼　辻口静夫様

たまはりし御恩謝しつつ悴みぬ

一月二十八日　きさらぎ会

たちまちに空一枚となる霰
傘に音立てて霰でありしかな
消息は空よりのもの夜の霰
歌留多とる全身に気を漲らせ
かるたには所有権なし飛ばしけり
紅白といふ競ふ色うたがるた

一月二十九日　時雨会

折れさうに落ちさうに軒氷柱かな
さめてより甘さ加はる福沸
水音の消えつつ作り滝氷柱
とび込んで来し旅話春隣
春近し予定確かめつゝ加へ
寒月の存在ビルのはざまより

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年一月五日「俳句研究」出句

あの角にバレンタインの日の予感
クロッカス土を拒んでをりにけり
畝といふアスパラガスの主張かな
ビル風の角度チューリップの角度
敷島の道メーデーの騒きかな

一月七日　蕉心会

目覚めとは七種粥の香るより
冬帝の威に折れ曲る水尾の先
冬帝を拒む高さに咲ける庭
侘助に又思ひ出を繋ぐ句座

一月十一日　朝日カルチャー若草句会

鏡餅海老が躍つてをりにけり
咲くものを従へ固き冬芽かな
大空に諸手を挙げて冬木の芽
鏡餅大きく未来語る子等
名木の冬芽名もなき木の冬芽

一月十四日　土筆会

きらきらときらきらと若水の綺羅
初鴉孤高飼犬孤独かな
日溜りといふ早梅の褥かな
福寿草これからといふ園の黙
これからはもう笹子とは呼ばないで

一月十六、十七日　高濱年尾を偲ぶ初句会

流れには冷たき音色ありにけり
雪雲の隠し切れざる富嶽かな
快晴の本栖湖雪の山中湖
冷たさを放ちてベテルギウスかな

一月十七、十八日　年寿会

雪富士と別れて一路南国へ
冬滝や写真に何か写りさう
片時雨どうせ僕雨男だもん
風除の二重三重浜の黙
冬凪に船ぽつねんと動かざる
日の出てふ冬暖かき目覚めかな
波の綺羅冬日育ててをりにけり
臘梅の香の滑り落つ斜面かな
暖房が却つて邪魔になる熟寝

一月十九日　草木瓜会

待春の海外つ国へ開きし日
初鏡あなたの牙は映さざる
今度こそあの人ゲット初鏡
武蔵野の稜線模糊と春を待つ

一月二十二日　登高会

初旅や全き富士の出来上る
寒椿裏庭といふ静けさに
人偲ぶてふ初旅の縁かな
寒椿数を競うてをらざりし
悴んで余生を語る齢かな
葉裏てふぬくみに隠れ寒椿

一月二十六日　若水会

虚子没後五十一年手毬唄
虚子館のベンチにぽつねんと手毬
新しき句碑の伽とし青木の実
お降にはんなり濡るる京言葉
お降や地震十五年偲ぶかに

一月二十六日　カトリック新聞選者吟

香部屋に朝の日差や春隣

一月二十七日　目黒学園句会

初富士の稜線といふ潔さ
目黒てふ恵方に向ふ山手線
嫁が君此処で逢つたが百年目
初電車阪神ファンを満載す

一月二十八日　百夜句会

室咲に佇つ恋多き女かな
鳥総松挿して主の出て行けり
青木の実はみ出してゐる旧家かな
影が先づ降り風花となりゆけり

一月二十九日　「俳句」出句

虚子館に十周年の春来る
主亡き犬小屋指呼に猫の恋
芦屋川上流獺の祭やも
春灯の消え俳礎の庭暮るる
虚子といふバレンタインの日の彼氏
紅梅の香を閉ぢ込めてゐるロビー
記念樹の桂長閑な高さかな
祝ぎといふ二月礼者の縁かな

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

闇掬ひ闇を返して風の盆　多摩　松井秋尚
風の盆すうつと沈みすつと立つ　同　同
手から手へ闇をなぞりて風の盆　同　同
虚子偲びつつ新涼の小諸訪ふ　京都　安原　葉
客どつと下車せり避暑地軽井沢　同　同
浅間山けふは見せぬと威銃　同　同
水音の耳に乾ける秋暑かな　東京　大久保白村
秋高し小諸に探す昼の星　同　同
虚子のこと語りて尽きず与良の秋　福山　竹下陶子
海中の一篇の詩を鱚に釣る　同　同
蟻の道にも伝統のありにけり　同　同
流灯や人の一生美しく　龍ケ崎　今橋眞理子
老の歩に合はす若き歩墓参　同　同
太陽の一日を終へて盆の月　同　同
走馬灯回り回りて更けてきし　奈良　古賀しぐれ
大阪の秋天のまん中に城　同　同
一城の鯱泳ぎ鰯雲　同　同
天に雲地に石を組み城の秋　たつの　浅井青陽子
三伏に耐へては果報読み耽る　同　同
坂がかる家路でありし大雷雨　同　同
離れなる書庫案内の道をしへ　香川　湯川　雅
法師蟬鳴き止みたくて鳴き変る　同　同
どちらからともなく離れ秋思の歩　神戸　山田佳乃
結局は独りとなりぬ虫の宿　同　同
辻棲の合はぬ話や麦茶飲む　同　同
漣に揺れて一人のボートかな　渋川　木暮陶句郎
想ふことふととぎれけり桐一葉　同　同
花野忌の風に灯されゆきし色　同　同
理科室の人体模型稲光　神戸　日下徳一
昏さとは森の囁き水澄める　同　同
婚礼の折詰かこむ夜食かな　同　同
窯を守る父母の夜食は子が運ぶ　相模原　木村享史
社会部の夜勤四五人夜食とる　同　同
海の日の海へ電車のまつしぐら　同　同
虚子の言夏炉の灰に書きて示す　宝塚　水田むつみ
硯洗ふ父の形見はこれ一つ　同　同
鵜は水へ鵜舟は闇に潜りゆく　神戸　涌羅由美
時に音たてて崩すも鵜松明　同　同
鵜川とはよべの絵巻を幻に　同　同
朝靄の晴れて避暑地の目覚めけり　同　同
ボート乗り榛名の神の掌　同　同
青春の声上げモーターボートかな　同　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（十二月号より）

雅　・比奈夫・くに彦
一　歩・しげ人・仁　義
佳　乃・暮　潮・昭　代
純　也・廣太郎

野に山に春一番が運ぶもの　横浜　小川みゆき

立春を過ぎて最初に吹く強い南風。フェーン現象もその一つということである。雀すら乗りくれば速い。

ただ、この句は物質のみならず、精神的なものを表現しているようだ。

春一番の運んで来る物も色々あるが、そのなかでも、やっと春だと思う心が、一番嬉しいのであって、体全体で受け止めて、解放感に浸る姿が伝わってくる。（雅）

昔ある女性アイドルグループがこの題名でヒット曲を歌っていたのも原因かも知れないが、この「春一番」という言葉自体万民の知るところとなっているだろう。この程第三版『ホトトギス歳時記』にも新季題として採用された。それに果敢に挑戦された作者である。春の到来を告げる明るい響きの伝わってくる季題であるが、大自然を通して大きく捉えているところが流石だ。最後に「運ぶもの」と、物事を特定せずに叙したところが、より大きな景となって伝わってくる。（廣太郎）

監視員緊張土用浪の浜　八尾　山下美典

土用浪は大きな台風が南方洋上にあるときに寄せてくる波のうねりを言い、とりわけ夏の土用の頃によく見られる。この波のうねりは海岸で泳ぐ人々にも、ボートやヨットで沖に出る人にも大変危険が伴うので、監視員の人たちは片時も目を放せない。私たちも子供の頃はその頃の海水浴は厳しく止められていたのであった。（比奈夫）

プールでもそうだが、遊泳する場所には、最近必ず「監視員」が高い椅子に座って泳いでいる人が溺れたりしないように見張っている。少し荒れぎみの「土用浪」を遊泳している人を監視するのは、結構気が張るだろう。楽しそうな遊泳客と、緊張した監視員との対比が面白く描かれている。（廣太郎）

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

汀子選

大潟の果てなき露に濡れしこと　東京　河野美奇
朝かげや動きそめたる露雫　同　稲畑廣太郎
星の空洗ひ上げたる大夕立　同
夕菅の閉ぢて湖畔の動き初む　京都　安原　葉
身寄りなき墓とて参る僧一人　同
拙僧のたしなみと言ふ汗手貫　東京　今井千鶴子
さつと雨過ぎて異国や初嵐　同
朝顔や花屋は今朝も濡れてゐる　神戸　後藤比奈夫
笹に吊る恋の一句もあらまほし　同
星合の夜のいきいきと筆硯　櫃原　稲岡　長
穏やかに二百十日の茅渟の海　同
模糊としてゐても夕月繊きかな　神戸　長山あや
しんしんと人の世遠ざかる夜霧　同
からまつの霧しづる音こころの音　同　三村純也
上京の子規忌もつとも任重く　同
鶏頭に埋れし墓と尋ねゆく　熊本　岩岡中正
黴びさせてならぬ言葉と思へども　同
地を走る蟻より梅雨の明けにけり

暁にはや露草の目ざめをり　豊中　瀧　青佳
活けてこそこの露草の紫よ　徳島　司　上﨑暮潮
箱庭や人に暇な日忙しき日　同
藍作り阿波に数軒藍茂る　相模原　木村享史
山河立上がりて梅雨の明けし空　同
高僧と人は知らずよ汗手貫　河内長野　吉年虹二
木天蓼の白翻し晴れる風　同
今朝の白昨日の白や沙羅落花　たつの　浅井青陽子
手庇に古町西日の路地中を　同
朽ち果てし鮎狩舟の懐かしや　奈良　古賀しぐれ
行く雲も花野も風の姿なる　同
表より裏より渡り島の秋　東京　田村　元
ダイヤ婚妻の顔見る今朝の秋　同
野分跡渋谷の街の落葉踏む　岩見沢　奥田智久
鈴蘭の冷たき香り流す風　同
鈴蘭の香を嗅ぎをるは旅人ぞ　神戸　後藤立夫
うろたへしごとく瓜提灯の消ゆ　同
亡者にもをとこをんなのゐる踊

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

大潟の果てなき露に濡れしこと　東京　河野　美奇

秋田県の八郎潟の埋め立ての広さに佇む作者の感慨。

星の空洗ひ上げたる大夕立　東京　稲畑廣太郎

大夕立の去った星空の綺羅。

身寄りなき墓とて参る僧一人　京都　安原　葉

僧としての心。

朝顔や花屋は今朝も濡れてゐる　東京　今井千鶴子

花屋の朝。

星合の夜のいきいきと筆硯　神戸　後藤比奈夫

七夕の筆や硯を身辺に。

模糊としてゐても夕月繊きかな　橿原　稲岡　長

少し光を得た夕月の存在。

しんしんと人の世遠ざかる夜霧　神戸　長山あや

夜霧に包まれた孤独。

上京の子規忌もつとも任重く　神戸　三村純也

子規忌の句会と講演の会の演者。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon